

2 漁 撈

アマゾンといえば、世界でも有数の魚の宝庫であるが、部落のあるデミニ河上流のトトビ河に入ると、魚影は急にうすくなる。そのためこの地域のインディオにとって、漁撈は農耕や狩猟などと比較してそれほど大きなウエイトを占めていない。

漁法としては、毒もみ、カゴですくう方法、弓矢を使う方法、手づかみ、つりなどがあげられる。このうち、つりにはFUNAI（インディオ保護局）が教えたもので、彼らの従来の漁法ではない。

毒もみ、カゴを用いる漁法は減水期（9月～3月）に行なわれ、川の水をせき止めたたまりで行なわれる。弓矢によるものは、狩猟の際と同じ要領で男性が行なう。

手づかみの方法は、夜に川の中に入ってゆき、魚のすんでいそうな土の穴に手をつつ込み、魚をとらえるもので、女性がおもに行なっている。これに限らず、漁撈はほとんどの場合、女性の手にかかっている。

毒もみの方法とは＜コンテアンタ＞と呼ばれる毒木を用いる。この木は背の低い熱帯樹で、これを50～60cmの大きさに切り、その切り株を他の木で打らぐだき、その幹から出てくる毒素（この株を打らぐだいている時すでに悪臭を放つ）で魚をとるのである。この＜コンテアンタ＞による毒もみの方法はグループを組んだ女性たち、5～10名で行なわれる。減水期の際にできる小さな水溜まりに、この女性たちが円陣を組み、一斉にこの毒木で水面をたたくのである。この場合、魚は死んでしまうのではなく、一種のマヒ状態になっているらしい。

カゴを用いて魚をとる方法も減水期に行なわれ、これも毒もみの要領と同じく、水たまりにおいて数人の女性が、カゴで魚を追いかけて回して魚をすくうというものである。ただこの場合、毒もみの方法と併用されるのがつねである。

このあたり（トトビ河）の魚種はなまず類が最も多く、そのほかボラによく似た魚などが多くとれる。もう少し下流に行けばよくつれるピラニアや、その他の魚類も、ここでは全くつれない。水流と水温が魚種に影響をおよぼしているのであろう。

漁獲高は減水期がもっとも多く、全体のほとんどを占める。しかし、増水期は以上のべたような漁法が使えないので、つりに頼ることになる。もちろん漁獲高は大幅に減る。この方法はFUNAIやミッションなどを通して取り入れられたもので、最近のものといえるだろう。

彼らはふつう魚をとる作業を、近くの支流および部落の近くを流れている、トトビ河本流（幅約10～20m）で行ない、めったに遠出はしない。しかしたまに行なう遠出の際（長くても5日程度）は5～10名の女性のパーティーに必ず1名の男性のエスコート役がつく。この時の漁法はほとんど＜コンテアンタ＞による毒もみ方法で魚をとる。

男性も時には漁撈にたずさわるが、その場合は弓矢で魚を撃ったりするのみにとどまる。